

「聖霊による証印—父・子・聖霊なる神の恵みと栄光」

エフェソ 1:3-14

2020. 5. 31 南与力町教会ペンテコステ礼拝

序：会堂での礼拝再開に感謝

本日からこのように会堂に集っての礼拝を再開できたことを心から主に感謝したいと思います。しかしまだコロナウイルスの感染のリスクはあり、様々な事情で教会に集えない方々もおられます。ライブ配信を見て家で礼拝をささげておられる方もおられます。そのような方々をも覚えつつ、共に礼拝をささげたいと思います。

本日はペンテコステ礼拝、聖霊降臨節の礼拝です。主イエスが復活し、天に上られた後、エルサレムに集まっていた弟子たちの上に聖霊が降りました。そして弟子たちは様々な国の言葉で神様の偉大な御業、そしてイエス・キリストのことを語り始めました。そして多くの信じる人が起こされ、教会が誕生したのです（使徒 2 章）。そのようなペンテコステを記念する日に、共に教会に集い、御言葉に聞き、礼拝できることは大きな恵みです。

① 私たちが礼拝する理由——三位一体の神の祝福

教会は「神様への礼拝」を何よりも大切にしています。コロナウイルスの影響で会堂に集えない時にも何とか礼拝ができるよう考えてきました。どこの教会もそのようにしてきたのだと思います。ではなぜ私たちにとって「礼拝」がそれ程大切なのでしょうか。改めて考えたいと思うのです。そしてそのことについて、今日の御言葉は豊かに教えてくれています。

このエフェソの信徒への手紙は使徒パウロによって書かれたものと言われています(1-2 節)。1-2 節で挨拶が記され、手紙の本文が始まります。次のような言葉で始まっています。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。」

原文では「ほめたたえられますように」という言葉が一番初めにきています。この手紙を書いたパウロは「ほめたたえられますように」という神様を賛美する、あるいは礼拝する言葉で本文を始めているのです。ではなぜ神様、すなわち「わたしたちの主イエス・キリストの父である神」はほめたたえられるべきなのでしょう。3 節後半では次のように言われています。

「神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」

私たちが神様をほめたたえるべきなのは、神様の方がまず私たちを祝福してくださいましたからです。そしてその祝福は「天のあらゆる霊的な祝福」と呼ばれています。それは地上の目に見える祝福とは違います。例えば、お金持ちになる、物質的に豊かになるというようなことではないのです。この手紙を書いたときパウロは牢獄の中にいました。そのことは 6 章 20 節でパウロ自身が「わたしはこの福音の使者として鎖につながれています」と言っていることからわかります。彼は福音を宣べ伝えたがゆえに、牢獄に入れられ、鎖でつながれてしまっている。そういう苦難の中にパウロはあったのです

(3:13)。そういう目に見える状況だけを見るならば、とても祝福されているとは言えません。しかしパウロはためらうことなく、「神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」と言うのです。ではその「天のあらゆる霊的な祝福」とは一体どのようなものな

のでしょうか。パウロはその祝福について続く4節から14節にかけて語っていくのです。

その全体を読んで気づかされることは、ここには三位一体の神、すなわち父・子・聖霊なる神の豊かな恵み、祝福が語られているということです。

まず1章4節では

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」とあります。

父なる神様の選びについて語られています。

そして1章7節では

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」と記されています。

御子イエス・キリストによる贖い、罪の赦しという恵みについて語られています。

そして1章13節では

「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」

ここでは「聖霊で証印を押された」という聖霊による恵みについて語られています。

このように今日の箇所全体を通して、父なる神による選び、御子による贖い、聖霊による証印という三位一体の神様の祝福・恵みが豊かに語られ、展開されているのです。

②神の選びと御子による贖い

まず神の選びについて見ていきたいと思えます。1章4節

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」

神様は私たちをキリストにおいて、キリストのうちに選んでいてくださいました。私たちがイエス・キリストを信じ、キリストと結ばれたのは、実は先に神様が選んでくださっていたからなのです。

なぜ私たちは選ばれたのでしょうか。私たちの側に神様に選んでいただくにふさわしい資質があったからでしょうか。そうではありません。神様の選びは「天地創造の前に」なされた、と言われていきます。私たちが生まれてくる前、それどころかこの世界が造られる前に、すでに神様は私たちをキリストにあって選んでくださっていた、というのです。これは私たちの理解を超えた驚くべきことです。

そしてその選びの目的は私たちが神の御前で「聖なる者、汚れのない者になる」ことです。「汚れのない」という言葉は「傷のない」と訳すこともできます。この言葉は神様への動物犠牲について使われています。律法において神様に献げる動物は「傷のない」ものでなければならないと定められています。そうでないと神様に受け入れられないのです（レビ1:3）。しかし私たちは元々「傷のない」ものではありません。自らの罪のゆえに傷のある者、汚れている者です。それゆえそのままでは聖なる神様の前に出ることができない、神様に礼拝をささげることができないのです。しかし、神様の方がそういうわたしたちを「聖なる者、汚れのない者、傷のない者にしよう」とキリストにあって選んでくださって

いたのです。なぜでしょうか。それは「神はわたしたちを愛して」とあるように、ただ神様の「愛」によることです。神様は私たちが何かができるから、ふさわしい資質があるからというのではなく、むしろ全くふさわしくない私たちを無条件に、一方的に愛してくださったのです。そしてその愛のゆえに私たちがキリストにあって選んでくださいました。

さらに5節ではこう言われています。

「イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」。

ここで「神の子にする」と訳されている言葉はもともと「養子にする」ことを意味する言葉です。私たちは元々神の子ではなく、神様に造られた被造物にすぎません。本来的に神の子であるのは、神の独り子イエス・キリストだけです。しかし神様はそのイエス・キリストを通して私たちをもご自分の子どもにしようと、御心のままに前もって定めていてくださったのです。それもまた神様の愛によることです。そしてその目的が1章6節に記されています。

「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。」

神様が私たちを選んでくださった目的は、私たちが御子イエス・キリストを通して神様から与えられた輝かしい恵み、その恵みのすばらしさをたたえるためなのです。

そして7節には次のようにあります。

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」

「贖われ」と訳されている言葉は元々「買い戻す」という意味があります。奴隷状態にあった者を、身代金（代価）を払って買い戻す、あるいは解放する、という意味があります。旧約聖書においては、エジプトで奴隷となっていたイスラエルを神様が贖われ、解放されたこと、あるいは自らの罪にゆえにバビロン捕囚にあったイスラエルの民が贖われる、という際に使われます。では私たちは何から贖われたのでしょうか。それは「罪を赦されました」と言われているように、私たちは罪から贖われたのです。私たちは皆、罪の奴隷状態にありました。罪に束縛され、支配されていたのです。自分の力ではそこから逃れることはできませんでした。しかしその私たちが神様が贖ってくださった、解放してくださった、ご自分のものとして買い戻してくださったのです。その代価は「御子イエス・キリストの血」です。聖書において「血」は「命」そのものです（創9:5等）。神様の愛する御子イエス・キリストの血、その命という尊い代価が支払われたことによって、私たちは罪から贖われ、自由にされたのです。そうして罪赦されました。それは神様の豊かな恵みによるものです。

そしてそのような豊かな恵みが与えられたのは、6節で見たように「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるため」なのです。そこに私たちが礼拝する理由があります。単に義務だから礼拝しなければならないというのではなく、神が御子イエス・キリストによって豊かな恵みを与えてくださったがゆえに、その恵みに感謝し、神様をほめたたえるのです。それが神様の目的にかなうことであり、そのような礼拝を神様は喜んでくださいます。

③ 聖霊による証印—御国を受け継ぐために (11-14)

このように父なる神様による選び、御子イエス・キリストによる贖いについて語られてきましたが、それだけではなく、私たちには聖霊による恵みも与えられています。1章13節をお読みいたします。

「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」

これまでずっと「わたしたち」という主語で語られてきたのですが、13節から突然「あなたがた」という言葉が出てきます。この「あなたがた」を理解するためには、すぐ前の12節を見る必要があります。12節

「それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです」。

ここには「以前からキリストに希望を置いていたわたしたち」とありますが、この「わたしたち」とは、キリストが来られる以前から旧約聖書を通してキリスト、すなわちメシアに希望を置いていたユダヤ人であるわたしたち、ということです。それと対比するようにして「あなたがた」と言われているわけですから、この「あなたがた」とは「異邦人」であるエフェソの教会の信徒たちのことを言っているわけです。パウロを含めたユダヤ人たちは「以前からキリストに希望を置いていた」わけですが、異邦人はそうではありません。この手紙の2章11節では次のように言われています。

「だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。」

私たち異邦人は元々、キリストとかわりなく、イスラエルに与えられた約束を含む契約とも関係なく、この世の中で希望を持たずに生きていたのです。しかし1章13節では、そういう「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです」と言われています。

もともとはキリストと関わりのなかった私たち異邦人も、真理の言葉、自らに救いをもたらす福音を聞き、それを信じることによって、約束された聖霊で証印を押されたのです。

「約束された聖霊」と言われているのは、旧約聖書において聖霊が注がれることが約束されていたからです。先ほどお読みいただいたヨエル書3章がその代表的な箇所です。また復活された主イエスも弟子たちに聖霊が降ることを約束なさっていました（使1:4-5）。そして実際、五旬祭のときにエルサレムに集まっていた弟子たちの上に聖霊が降ったのです。それがペンテコステに起こった出来事です。しかし、今日のところでパウロは、ペンテコステの時に集まっていた弟子たちだけでなく、福音を聞いて信じたあなたがたは皆、約束された聖霊で証印を押された、と言っているわけです。「証印を押す」とはそれが自分の所有であることを表し、保証するためのものです。今日でも重要な書類には印鑑を押すのだと思います。それが確かに自分のものであることを保証するためです。それと同じように神様は聖霊によって私たちに証印を押してくださった。ハンコを押してくださった。そうして私たちが確かに正真正銘、神のもの、神の所有であるという印をつけてくださったのです。もちろんこの聖霊によるハンコは目には見えません。しかし福音を聞いて信じた者には確かに与えられています。そもそも聖霊によらなければ、誰も「イエスは主である」と信じ、告白することはできません（Iコリ12:3）。また私たちが神の子どもとして神様に向かって「アッバ、父よ」と信頼して呼ぶことができるのも、聖霊の働きの

おかげなのです（ロマ 8:15-16）。その聖霊が与えられているということは、神様から「これはわたしのものだ」というハンコ、印鑑を押されたのと同じことなのです（黙 7:3-8 参照）。

そして 14 節では「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです」と言われています。

ここで「保証」と訳されている言葉には元々「手付金」という意味があります。売買契約を結ぶ際、買う人がその契約を守ることを保証するために支払う「手付金」、前払金のことです。聖霊とは、私たちが御国という相続財産全体を受け継ぐことができることを保証するために、神様が私たちに前もって支払ってくださった「手付金、保証金」なのです。そうして「わたしたちは贖われて神のものとなり」と言われています。原文では「神の所有の贖いへ」という言葉です。「神の所有」とは私たちのことです。「贖い」とは 1 章 7 節に出てきた言葉と同じです。私たちはすでにイエス・キリストの血によって贖われています。罪から贖われ、神のもの、神の所有とされているのです。しかしまだ完全に贖われているわけではありません。ローマの信徒への手紙 8 章 22、23 節でパウロは次のように語っています。

「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」

聖霊という初穂（保証）をいただいているわたしたちもなお、体が贖われることを心の中でうめきながら待ち望んでいるのです。私たちは「罪赦された」という意味ではすでに贖われているのですが、しかしまだ体は贖われていない。すなわち、体を含めた私という存在全体が贖われ、神の国に入れられているわけではありません。それゆえ、その時までにはこの地上において、この体においてなお苦しみ、呻かなければならないのです。しかし、私たちの救いの希望は確かです。なぜなら御国を受け継ぐための保証として聖霊がすでに与えられているからです。聖霊による証印が押されているからです。そうして完全に贖われ、救われるとき、私たちは「神の栄光をたたえることになる」のです。

結論：

私たちはこの地上にあってはなお様々な困難や苦しみ、労苦を経験しなければなりません。しかし私たちにすでに神様から天のあらゆる霊的な祝福が与えられています。すなわち、父なる神様による選び、御子イエス・キリストによる贖い、聖霊による御国の保証が与えられているのです。それゆえに、私たちはその神様の恵みに感謝し、希望をもって、神様のご栄光をほめたたえていきたい。そのような礼拝をささげながら共に歩んでゆきたいと願います。祈ります。

祈り

父・子・聖霊なる三つにして一つなる生ける真の神様。あなたの聖なるみ名をほめたたえます。私たちは罪ゆえに汚れ、傷つき、あなたにふさわしくないものであります。しかし神様、あなたはそのような私たちを無条件に愛し、受け入れ、イエス・キリストにあって選んでくださっていました。そしてイエス・キリストの尊い犠牲によって私たちを贖い、罪を赦してくださいました。心より感謝いたします。またあなたは私たちが御国を受け継ぐ保証として聖霊を与えてくださいました。この世にあってはなお苦しみや試練がありますが、どうぞ私たちがそのあなたの豊かな恵みを覚え、御国を仰ぎ望み、あなたをほめたたえながら歩んでいくことができますように、守り導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。